

全国公立学校教頭会研究大会参加報告

8月4日(木)、5日(金)の2日間にわたり、第53回全国公立学校教頭会研究大会・和歌山大会が、全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして」、サブテーマ「～学ぶ楽しさ・わかる喜びを感じ 未来に向け力強く生きる子どもの育成～」を基に、全国から2,700名余りの会員が参加し、盛大に開催された。

1日目は、和歌山ビックホエールを会場に、開会行事の後、紀州の伝統芸能である黒潮・躍虎太鼓保存会による太鼓の演奏や演武と雑賀鉄砲衆の迫力ある火縄銃の実演があった。午後は「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校づくり」と題した全体シンポジウムが開かれ、東尾 修氏(西部ライオンズ元監督)や影山英男氏(立命館大学教授)ら4名のシンポジストが熱い思いを語った。

2日目は、八会場に分かれ、八つの分科会と二つの特別分科会が開催された。私が参加した第三分科会の参加者は258名で、30グループに分かれ協議した。午前中に行われた和歌山県田辺市立三里小学校が提言した「地域連携・学社融合の推進を目指す取組み ～屋外運動場の芝生化事業を通して～」についての内容とグループ別協議で出された意見等を報告したい。

三里小学校は紀伊山地の山間にあり奈良県に隣接している。昔は林業で生計を立てていたが、過疎化や少子高齢化が進行し全児童数は40人前後である。児童同士で遊ぶ機会が少なくなり、子どもの体力や運動能力が低下していた。また、住民の高齢化により学校と住民との距離が大きくなっていった。そこで、前任校で屋外運動場を芝生化した経験のある校長のリーダーシップの下、教頭がコーディネーターの役割を果たして、学校と保護者や地域住民の連携を強化し、教育活動の一層の推進に向けた教育条件整備を行うことを目指して屋外運動場の芝生化を目指したという。

芝生が運動場全体に生えるまで児童が使用できない等の反対意見があったが、学校や地域の課題を地区長会の機会に公民館や中学校へ出向いて保護者や地域住民、関係諸団体に説明し協力を要請した。作業には130名の協力を得て、1万5千の苗を植え、70日後には運動場一面に芝が広がった。成果が目に見えるにつれて地域住民が学校へ足を運ぶようになり協力してくれるようになった。

芝生化により、怪我をしない安心感から運動場で遊ぶ児童が増え、素足で走れるので健康にも効果があり、また、照り返しが少ないため3度ほど気温が下がり、省エネ効果がでたという。芝生のぬくもりや優しい感触、緑色が児童の心を落ち着かせ、癒しの効果もあるようだ。

保護者や地域住民と職員・児童の協働作業により、人間関係が深まり学校への協力が得やすくなり、芝生完成後も良好な関係が続き、敬老会と児童のグランドゴルフなど新たな交流も広がっている。

芝生化推進により地域連携と学社融合の具現化が図られた。しかし、芝刈り機やスプリンクラー等の設備に百万円以上かかり、肥料や刈り取った芝生の処理等維持・管理に手間暇がかかることが課題であるという。また、芝生化を推進した職員が異動した後も芝生化を維持するためには、保護者や地域住民の協力が必要不可欠であり、芝生の維持・管理に協力してくれる組織を学校の外につくるなどの活動が必要ではないかという意見が出された。

教育環境整備と維持には、やはり人と組織、予算が課題となるが、コーディネーターとしての教頭の役割の重要なことを改めて感じた。

(学校運営研究部 小林 誠一)